

ご挨拶

畿央大学学長
冬末智子

白雲たなびく弥生の空が清澄な思いを運んで参ります。
この時に当たり、いよいよ人間環境デザイン学科においても第6回卒業式を迎えることになりました。思考すると人間の生命は環境によって左右されると言っても過言ではないと思われます。以前「狼少年」との題名で講演を聞きましたが、その要旨は、理由はともかく人間として生まれながら狼仲間として実生活は森林の中を駆け回り、狼の様に遠吠えをしていたとの内容でありました。人間であっても生活すべての環境によって人格形成が多大の影響を受けることの極端な内容でありました。

本学の健康科学部人間環境デザイン学科は私達の生活環境のすべてに影響を与えている住居、衣服材料、色彩等日々生活に直接関係する広範な研究の成果を問うものであります。特に本年度は昨年東日本大震災の影響による被害の状況を心深く秘めて、建学の精神の真髄を具体化した制作発表であると感受しております。

この度畿央大学開学10年目を迎えるに当たり、個性豊かな魅力ある卒学生達が、高邁な教授陣の懇切な指導と共にその成果を発表する機会を得たことは誠に意義深く感謝に耐えないところであります。

ここに今後更なる研鑽を重ね、全学あげて社会に貢献されることを強く期待しまして、ご挨拶と致します。

目次

ご挨拶		03	
■論文		07	
学長賞	植村 文彦 廣瀬 学 堀川 裕亮	環境と景観に配慮した寒冷紗カーテンの評価に関する研究 ～吉野山を例にして～	08
	江蔵 優希 阪脇 綾香 西川 このみ 栢木 幸一郎	人の身体よりも規模の大きい空間における移動の記憶 および記憶に基づいた移動の記憶の過程について	12
	小川 健嗣 松田 樹貴	就職活動時の証明写真に関する研究 ー背景色の効果を中心としてー	20
	河合 謙至 寺西 祐人 峯廻 雄一	冒険遊び場の実践を通じた地域への働き掛け	22
	櫻井 駿也 西村 信彦	通所型幼老複合施設の施設計画に関する調査	24
	對馬 亮	大学生の生活環境における においに関する意識調査	26
	福本 大将 水谷 竜史 村上 友梨奈	畿央大学における省エネ・環境意識の実態調査と改善提案	28

■ 制作 31

優秀賞	奥本 紗弓	青い薔薇の奇跡	32
	岡村 若奈	Wood Village ー暮らしの中の家具館ー	34
	小川 洋平 澤田 浩孝	広がるおいねっとの輪 ー節電・エコ・おいねー	36
	北出 裕也	Education Cell	38
	友田 実希	キトラ古墳 四神公園 <small>しじん</small>	40
	蛭本 章子	商WIND「商業施設+風」	42

	尾内 愛	点在 ～美術館からまちへ～	44
	小野山 静香	Celebration	45
	葛井 愛	草木で染める浴衣 ～ママと娘の色重ね～	46
	勝瀬 勇登	ダンボール椅子 C3	47
	金井 昂大	K	48
	高井 乃利古	和 ～銭湯～	49
	田上 千穂	藍の引き算	50
	中村 雅也	シーズールーム ～とある寿司屋の空間分割～	51
	西澤 法子	本の公園	52
	橋田 英里子	MUSE in Flower Garden ～レースのお花に囲まれて～	53
	林 克彦	寺 ～技術を後世に～	54
	番場 大平	葛城の宿	55
	福島 和輝	鉄骨スケルトンによる斜面地住宅のケーススタディ	56
	松井 愛	Fitness Park ～フィットネス+自然～	57
	松谷 美紀	真綿の可能性 ～幸せを運ぶ SILK WORM ～	58
	八木 逸斗	つむぐ インスタレーション ～光に触れる露地～	59
	山本 太郎	KASETSU JUTAKU「みんなの家」	60

制作風景	62
発表風景	64
講評	66



植村 文彦
Fumihiko Uemura



廣瀬 学
Manabu Hirose



堀川 裕亮
Yusuke Horikawa

受賞のことば

プロジェクトゼミの頃から研究を始めて、吉野の調査、慣れない縫製作業、様々な実験で忙しい毎日だった、でも終わってみてかなり充実した日々だったと思う。この研究は私たちだけではこのような評価を得ることはできなかった。ご指導していただいた佐藤先生や学部の先生方、そして応援してくれたすべての人に感謝をこめて、「ありがとうございます!!」

環境・景観に配慮した寒冷紗カーテンの評価に関する研究 ～吉野山を例にして～

I.はじめに

私たちは、昨年度のプロジェクゼミ「吉野山の街並みにおける色彩景観調査」の経験を踏まえ、吉野山に対して親しみを覚えるとともに、より魅力的な街並みにしたい。しかし、その中で、街路上を覆うように張られた日覆いが景観を阻害しているのではないかと感じた。そこで、寒冷紗を使用したカーテンを製作し、街並みへの社会実験（街並みへのデザイン要素とその評価）を実施するとともに、カーテンの遮光性能について検討することとした。すなわち、本研究は、景観要素のデザイン面と遮光性能の実用面を検討することによって、日覆いに代わりうる寒冷紗カーテンの可能性について検証することを目的とする。

II.研究方法

1.寒冷紗織物から寒冷紗カーテンへ

寒冷紗織物（丸山繊維産業製）は目の粗い布である。カーテン用途への展開を考えると通常のカーテンのように1枚仕立てに縫製した場合、強度や透過性、軽すぎることによる懸垂に問題点はないだろうか、などのことが考えられた。そこで、まず試料寒冷紗布の色と重ね効果を分光反射率の変化から検討した。図1は、赤（R）寒冷紗布の重ね枚数のパネルとその分光反射率、及び、緑（G）の分光反射率を示す。

分光反射率は、布を1枚から2枚へと重ねることによって大きく低下するが、それ以

上重ねても、その効果が小さい。カーテンへの縫製という技術面からも総合的に判断して、2枚重ねカーテンで行うことにした。

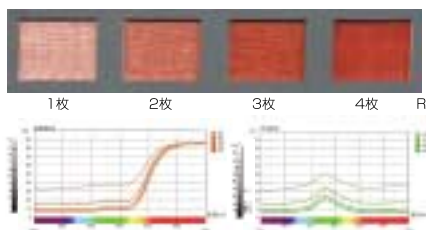


図1 寒冷紗布の重ねによる分光反射率の変化

2.社会実験

2-1.実験場所と評価方法

吉野山まちづくり協議会の協力を得て、5店舗に寒冷紗カーテンを懸垂するという社会実験を行った。図2に社会実験の場所とその店舗写真を示す。

2-1-1 評価群と評価方法

- ①吉野山住民 アンケート配布（225軒）
回収（126軒） 回収率56%
- ②吉野山における街かどアンケート
男性：13名 女性：20名
- ③畿央大学学生 男性：27名、女性：26名
平均年齢18歳

2-1-2 主な評価項目

①寒冷紗カーテンの「見た目」 ②寒冷紗カーテンの「色合い」 ③寒冷紗カーテンの「材質」に対して、それぞれ、吉野山の街並みに①よく合っている ②まあまあ合っている ③合っていないの3択回答を得た。また、自由意見も求めた。



図2 社会実験の場所とその店舗写真

2-2. 物理的性能の評価方法

カーテンの遮光性、温度の計測方法

計測は、①吉野山店舗 ②大学構内南面 ③大学研究室内北面 の3場所で、寒冷紗カーテンの遮光性（照度、紫外線強度）、温度・湿度効果を計測した。また、カーテンを透過した光による室内光への影響については、カーテン内外の分光放射輝度分布から検討した。なお、3場所で、計測周辺の構造、空間的条件が異なるが、基本的測定条件はほぼ同じになるようにした。測定位置を図3に示す。カーテン懸垂の有無による物理量の変化から、カーテンの物理的性能を検討した。

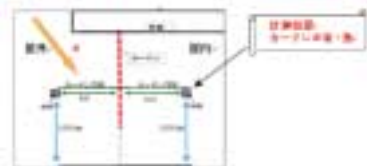


図3 カーテンの懸垂と計測位置の側面図

2-3 カーテンの懸垂による

店内の見え方への影響（モデル実験）

寒冷紗カーテンを通して店内がどのように見えるか、見え方への影響について検討した。実験は、運動機能実験室とその中の個室（暗室）を用い、外が明るく中が暗い（昼間）と、中が明るく外が暗い（夜間）を想定した条件の2パターンで行った。実験室内の個室の扉部分に寒冷紗カーテンを取り付け、その個室を店内に見立ててランドルト環に対する視力検査を行った。また、店内商品を想定した

パッケージの文字や柄を判別できるか、見えやすさなどの自由意見を求めた。

Ⅲ. 結果と考察

1. 社会実験による評価

1-1. 街並みとの調和性を「見た目」

どのように評価されたか？

問1は、寒冷紗カーテンが街並みの中で、どのように見えるか？いわば、街並みとの調和に関する総合評価点を問う質問である。図4は、問1の結果、①よく合っている ②まあまあ合っている ③合っていない と回答した住民（回答者）数とその比率で示したものである。



図4 寒冷紗カーテンは「見た目」街並みに合っていますか？（吉野山住民）

図より、①まあまあ合っていると答えた回答者が、②よく合っていると答えた回答者数よりも多いが、①と②を合わせると、住民（回答者）の約83%が寒冷紗カーテンに対して高い評価をしていると言える。

1-2. 「見た目」評価に吉野山住民の

年代の影響はあるのか？

問1に対する回答結果を住民の年代別に集計し、回答との関連についてクロス集計を行い、クラスカル・ウォリス検定による有意判定（帰無仮説：見た目の評価に年代の影響はない）を行った。検定結果を表1に、年代別評価結果を図5に示す。

χ^2 検定の結果、 P 値 $0.0145 < \alpha = 0.05$ すなわち、帰無仮説が5%の有意水準で棄却された。有意水準5%であるが、「年代によってカーテンの見た目評価には意見の違いがある」ということが明らかになった。また、図5の結果から、吉野山住民の高齢化が著しいことがわかるとともに、年代によって、

表1.「見た目」評価に及ぼす年代の影響
クラスカル・ウォリス検定

クラスカル・ウォリス検定 (Kruskal Wallis test)

水準	20代	30代	40代	50代	60代	不明
n	4	4	4	4	4	4
平均順位	5.75	8.88	13.38	18.75	20.00	8.25
クラスカル・ウォリス検定 ** : 1%有意 * : 5%有意						
カイニ乗値	自由度	P値	判定			
14.1789	5	0,0145	*			

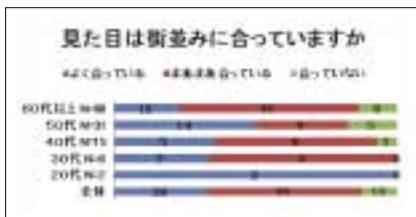


図5 「見た目」に対する年代別評価結果

①合っている ②まあまあ合っている ③合っていない に占める回答比率が異なるが、まあまあ合っているまでを含めると、いずれの年代においても評価された、と言える。一般的には、年代が高くなると保守的になると言われる。新しいものを取り入れるには抵抗があるのではないかと危惧されたが、大半の住民(回答者)に高い評価を得ることができた。

1-3.「見た目」評価に吉野山住地区の

影響はあるのか？ また、店舗経営者かどうかの影響はあるのか？

吉野山は多くの観光客が訪れる街ではあるが、桜と紅葉(特に桜)の限られた期間に集中するという特徴がある。したがって、常時店舗を開けている住民の他に、イベント時のみ店舗を開ける住民も多い。いずれにしても、寒冷紗カーテンを懸けるかどうかは店舗経営者の判断である。その点を考慮すると、「まあまあ合っている」までを含めた評価比率で見ると、吉野山全住地域、店舗経営者(イベント時を含む)、いずれの立場から見ても、寒冷紗カーテンは吉野山の人々に受け入れられる可能性があることが明らかになった。なお、「色合い」「材質」に関してもほぼ同様の評価結果であった。一方、観光客、畿央大生についても、吉野山住民とほぼ同様に高い評価を得た。

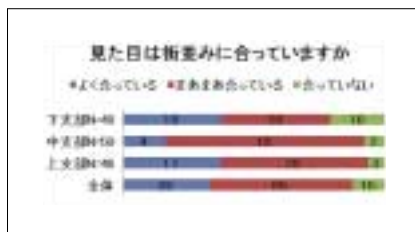


図6 「見た目」評価に対する住地域の影響

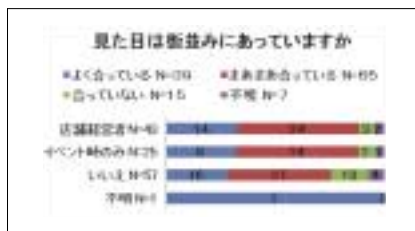


図7 「見た目」評価に対する店舗経営の影響

2.遮光性(紫外線遮蔽性能、照度、光色)への影響

寒冷紗カーテンの遮光性に関する検討を

①社会実験現場 ②大学構内南面 ③研究室北窓の3場所で行ったが、比較的安定したデータが得られる「北窓実験」の結果を図8(紫外線遮蔽性能)と図9(照度)に示す。

いずれも、図3に示すカーテンを懸垂しない場合の室内側500mm位置における紫外線強度($\mu\text{W}/\text{cm}^2$)と照度(lx)の値を100%としてカーテン懸垂の効果を表示しているカーテンの遮光性能が明らかに認められる。

色の効果でみると、色の明るい淡色よりも濃色の方が大きい。中でも、緑が最も効果が認められ、黒よりも効果が大きい。色材による光(可視、紫外)の吸収という点からは説明がつきにくく、サンプル寒冷紗布を検討したところ、緑色寒冷紗布が他の布よりもわずかであるが糊づけが固く、手触りとして厚く感じられた。

以上の結果は、カーテン用途向け寒冷紗布の開発に向けて、より効果的な着色仕上げの方向が示唆される。

室内光は、室内雰囲気演出に大きく影響する。店舗における室内光は、明るさ(照度)

だけでなく、光色(分光分布)についても考慮する必要がある。

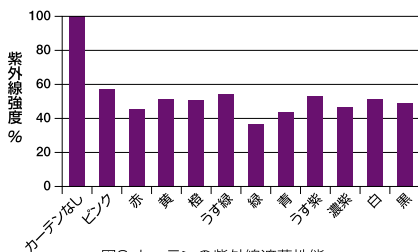


図8 カーテンの紫外線遮断性能 (カーテンなしを100%として)

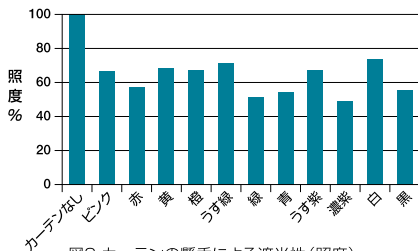


図9 カーテンの懸垂による遮光性(照度) (カーテンなしを100%として)

色カーテンからの透過光が室内光に及ぼす影響について検討した。なお、実験は室内灯を消し、北窓自然光の透過光のみで計測した。

図10は、窓に差し込む北窓光の分光放射輝度、および、色カーテンを懸垂した場合の室内光の分光放射輝度分布を示している。なお、室外光の放射輝度は、室内光の放射輝度に比べると、約1桁高い値である。光がカーテンを透過すると、カーテン素材の光吸収物質(色材)の影響により、透過光の分光分布が変化し、色ごとに輝度の低下に違いが認められる。

白カーテンでは、入射光の光成分がそのまま室内への透過光になっているのに対し、例えば、赤カーテンでは、赤み成分の多い光へと変化している。このことを利用するならば、カーテンは、カーテンの表面色による視覚効果とともに、透過光によって室内雰囲気に影響を及ぼす可能性が考えられる。

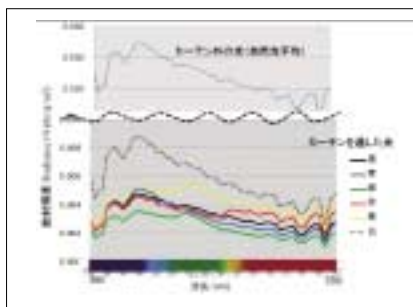


図10 北窓光の分光放射輝度分布 室外と室内光の比較

3.カーテン懸垂による見え方への影響

図11は、カーテンを懸垂した場合の店内の見え方(見えにくさ)への影響について、視力を検出値として計測した結果を示す。重ね枚数の増加とともに視力は低下し、一方、紫外線遮断率は重ね枚数とともに増す。以上の結果からも、寒冷紗布の2枚重ねカーテンが、製品としての最適条件であることが分かった。

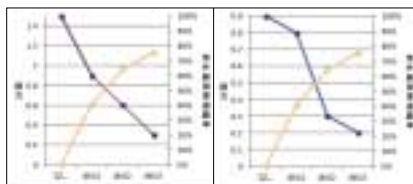


図11 寒冷紗カーテンの重ねによる見えやすさの低下と紫外線強度の低下率の関係

IV.結論

- 1.寒冷紗カーテンは、吉野山街区において社会実験をした結果、吉野山住民、観光客、若者、いずれにも高い評価を得ることが出来た。
- 2.寒冷紗は、薄くて目の粗い織物であるが、2枚重ね程度でも紫外線を大幅に吸収できる。また、照度低下による店内の明るさ、外部からの透視性の点からも2枚重ねが適する。
- 3.寒冷紗カーテンが吉野山の街並み景観の向上に寄与することを期待したい。

謝辞 吉野山まちづくり協議会 ならびに
丸山繊維産業(株)様に深く感謝致します。



江蔵 優希
Yuki Ezo



阪脇 綾香
Ayaka Sakawaki



西川 このみ
Konomi Nishikawa



栞木 幸一郎
Koichiro Hashinoki

人の身体より規模の大きい空間における移動の記憶 および記憶に基づいた移動の過程について

目 的

空間認知は、ある特定の目標を達成するために、空間に関する情報を表現したり操作したりすることである (Hegarty & Waller, 2005)。空間認知の研究を行うにあたって、人が視覚的および空間的な情報をどのように表現あるいは表象し (represent)、どのように処理するかを明らかにすることが重要である (Shah & Miyake, 2005)。

空間認知の表象や情報処理について明らかにするために、現在もっともよく用いられている平面空間上の課題の特徴は以下の通りである。(1) 参加者の身体運動を伴わない、(2) 視座はほぼ固定で上から目線で学習およびテストが行われる、(3) 参加者は情報の全体像と、全体像の中での要素の位置関係や向きを位置づけられる、さらに、(4) 学習とテストとの関係において、外的環境の文脈が一致している。

これらの特徴を考慮すると、空間認知の情報および情報処理について、以下の条件下でも平面空間上と同様の空間認知の表象および情報処理が用いられるかどうか疑問である。すなわち、(i) 学習時やテスト時に身体移動を伴うことを参加者に要求するような身体よりも規模の大きい実験空間内において、(ii) 視座が身体運動に伴って移動し、上から目線で順序系列を符号化および再生できない場合、(iii) 全体像を一望できない身体よりも規模の大きい実験空間内における、実験参加者の局所的な視野において符号化および再生が行われる場合、(iv) 学習およびテストにおいて外的環境の文脈が一致しない場合、である。

そこで、わたしたち研究グループは、身体よりも規模の大きい実験空間を構築し、この実験空間と平面空間とを対応づけた記録材料を開発した。そして、学習およびテストにおける環境文脈の一致・不一致を実験的に操作した。

実 験

デザイン 2 (学習条件: 平面空間・実空間) × 2 (テスト条件: 平面空間・実空間) の2要因計画。いずれも実験参加者内条件。

実験参加者 4年制大学生32名。

実験装置および実験環境 実空間については、Figure 1 に示す実験空間を制作した。この空間は760×760cmの広さである。床面には40×40cmのウレタン製マットを敷き詰めた。約100cm間隔で高さ2mの紙管柱を7×7本立て、6×6マスの部屋とした。この実験空間の制作においては、建築家の坂(2011)の作品を参考にした。Figure 2 に示すとおり、実際の実験においては、スタート地点(外的環境としての壁の“Smile”マークに遠い側)とゴー

ル地点 (“Smile” マークに近い側)のみマットの色を変え,弁別するための手がかりとした。また,上部の構成を外した。



Figure 1. 実験空間 (外的環境との位置関係を含む)



Figure 2. 実験空間およびその映像記録時の3人称カメラアングル (手前の白いマットがスタート地点,奥の白いマットがゴール地点)

平面空間については, Figure 3 に示すとおり,実空間を平面図化したものを用いた。

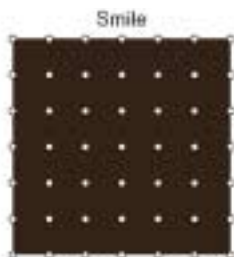


Figure 3. 平面空間の符号化時に用いた画像

テスト時の平面空間条件においては, Figure 4 に示す,スタート地点をS,ゴール地点をGと描いた白黒印刷の平面空間を回答用紙として用いた。



Figure 4. 平面空間のテスト時に用いた回答用紙

材料 学習課題の材料,すなわちスタート地点からゴール地点まで参加者がたどるルートについては,平面空間に基づいて作成した。Figure 3 の平面空間に, Figure 5 に示すとおり,スタート地点(右下),チェックポイント1地点(任意),チェックポイント2地点(任意),ゴール地点(左上)としての目印を,マス目を埋めるように置き,目印間を線で結んだ。これらをアニメーションでスタート地点からゴール地点までたどるようなプレゼンテーションをMicrosoft PowerPoint 上で作成した。アニメーションについては,直線1本が表示されるのに1.5秒,スタート地点,ゴール地点,およびチェックポイントが表示されるのに1.5秒の設定を行った。スタート地点からゴール地点までのアニメーションが表示されるのに,約15秒間を要した。

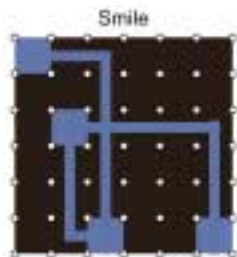


Figure 5. 平面空間上で学習する課題の材料例

以上のように作成したルートのアニメーションを,1つの実験条件につき8試行作成した。実空間における材料については,このアニメーションに基づいた。

手続き 個人ごとに実験を行った。実験参加者は4条件すべての課題を遂行した。条件間の順序は実験参加者間で相殺した。以下,実験条件ごとの教示である。

- (1) 平面空間上で学習し平面空間上でテストする条件:平面空間上でスタートからゴールまでのアニメーションが表示されるので,スタート地点からゴール地点までのルートおよびチェックポイント2地点の位置を覚えておくよう実験参加者は教示された。また,実験参加者にはテスト時の回答用紙があわせて配布され,実験者の合図とともに,マジックペンでスタート地点(回答用紙Sマーク)からゴール地点(回答用紙Gマーク)まで,ルートを線で,チェックポイントを○印で描くよう教示された。
- (2) 平面空間上で学習し実空間内でテストする条件:平面空間上でスタートからゴールまでのアニメーションが表示されるので,スタート地点からゴール地点までのルートおよびチェックポイント2地点の位置を覚えておくよう実験参加者は教示された。また,実験参加者は,実験者の合図とともに,実験空間内のスタート地点に入り,アニメーションで表示されたルート通りにスタート地点からゴール地点までを歩いてたどること,およびチェックポイントにおいては立ち止まり左手に持った蛍光色の棒を高く掲げることが教示された。
- (3) 実空間内で学習し平面空間上でテストする条件:実験参加者は実験空間のスタート地点前に立つよう求められた。実空間内をスタート地点からゴール地点まで実験者が実際に歩いてたどるので,実験者の後をついて歩き,スタート地点からゴール地点までのルートおよびチェックポイント2地点の位置を覚えておくよう実験参加者は教示された。さらに,実験者の合図とともに,マジックペンで回答用紙のスタート地点(回答用紙Sマーク)

からゴール地点(回答用紙Gマーク)まで、ルートを線で、チェックポイントを○印で描くよう教示された。

- (4)実空間内で学習し実空間内でテストする条件:実験参加者は実験空間のスタート地点前に立つよう求められた。実空間内をスタート地点からゴール地点まで実験者が実際に歩いてたどるので、実験者の後をついて歩き、スタート地点からゴール地点までのルートおよびチェックポイント2地点の位置を覚えておくよう実験参加者は教示された。さらに、実験者の合図とともに、実験空間内のスタート地点に入り、学習したルート通りにスタート地点からゴール地点までを歩いてたどること、およびチェックポイントにおいては立ち止まり左手に持った蛍光色の棒を高く掲げることが教示された。

結果と考察

正答率 各条件における正答率の平均をFigure 6 に示す。正答率に関して、2要因分散分析を行ったところ、学習要因の主効果が有意(平面空間>実空間)であり、交互作用が有意であった。平面空間上で学習した場合には、平面空間上でテスト>実空間内でテストであり、実空間内で学習した場合には、実空間内でテスト \geq 平面空間上でテストであった。この結果、学習時の環境文脈とテスト時の環境文脈とが一致していると正答率が高まるという環境文脈依存効果が見られた。

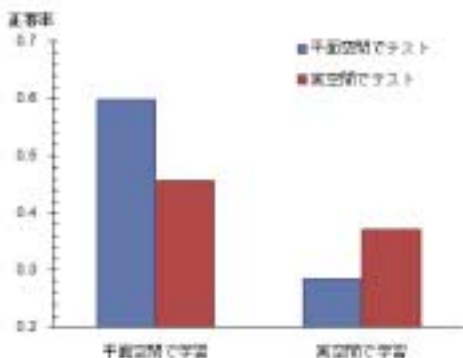


Figure 6. 学習条件およびテスト条件の関数としての正答率

チェックポイントの誤答率 各条件において、チェックポイントの位置を誤った確率の平均をFigure 7 に示す。エラー率に関して2要因分散分析を行ったところ、学習条件の主効果が有意であり(平面空間<実空間)、交互作用が有意であった。平面空間上で学習した場合、実空間内でテスト>平面空間上でテストであり、実空間内で学習した場合、平面空間上でテスト \geq 実空間内でテストであった。さらに、平面空間上でテストした場合、実空間内で学習>平面空間内で学習であり、実空間内でテストした場合、実空間内で学習>平面空間内で学習であった。この結果、エラー率についても環境文脈依存効果が見られたが、実空間内で学習した場合のエラー率が平面空間上で学習した場合のそれを上回っており、実空間内で学習した場合には、チェックポイントをテスト時に位置づけるのがより困難であるといえる。

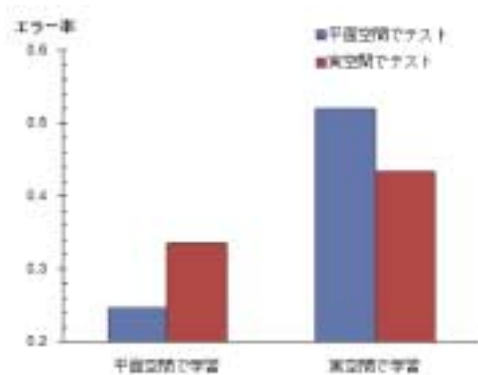


Figure 7. 学習条件およびテスト条件の関数としてのチェックポイントのエラー率

スタート地点からゴール地点までの反応時間 各条件における反応時間の平均を、秒単位で Figure 8 に示す。反応時間に関して、2要因分散分析を行ったところ、学習条件の主効果（平面空間<実空間）、テスト条件の主効果（平面空間<実空間）、および交互作用がそれぞれ有意であった。平面空間上で学習した場合、平面空間上でテスト<実空間内でテストであり、実空間内で学習した場合、平面空間上でテスト<実空間内でテストであった。さらに、平面空間上でテストした場合、平面空間上で学習<実空間内で学習であった。反応時間の交互作用という点から考えると、平面空間上で学習する場合と実空間内で学習する場合とでは、その情報処理が異なり、符号化される表象が異なる可能性が示唆される。

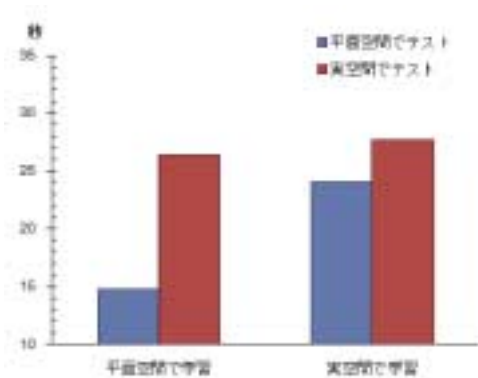


Figure 8. 学習条件およびテスト条件の関数としてのスタートからゴールまでの反応時間

次に、各条件間の符号化方略の違いや、表象の違いを明らかにするために、各条件内で正答および誤答別に、チェックポイント条件（スタート地点（S）-チェックポイント1（C1）、チェックポイント1（C1）-2（C2）、チェックポイント2（C2）-ゴール地点（G））の反応時間を算出した。さらに、各条件における参加者の行動記録をビデオにより解析した。

平面空間上で学習およびテストした条件の分析 (西川)

正答および誤答数が中ぐらいの22名を分析対象とした。各チェックポイント条件における正答・誤答別にした反応時間の平均値をFigure 9 に示す。2要因分散分析を行ったところ、交互作用が有意であり、C1-C2において、正答<誤答であった。

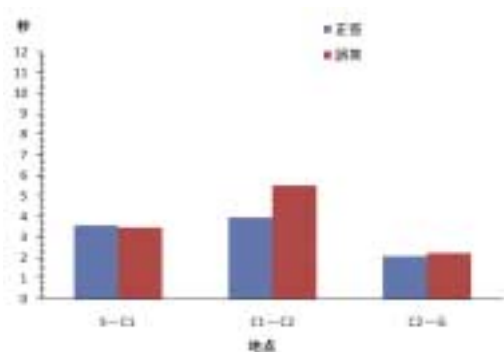


Figure 9. 平面空間上で学習およびテストした条件における正答・誤答およびチェックポイント条件の関数としての反応時間(n=22)

参加者が正答であった場合には、躊躇せずに一気に回答紙に記入していた。これに対して、誤答であった場合には、曲がり角で躊躇してペンを止めることが多かった。正答・誤答に関係なく、参加者は回答用紙のマス目を数えており、マス目を手がかりにルート覚えていたと考えられる。

平面空間上で学習し実空間内でテストした条件の分析 (江蔵)

同様に正答および誤答数が中ぐらいの22名を分析対象とした。各チェックポイント条件における正答・誤答別にした反応時間の平均値を Figure 10 に示す。2要因分散分析を行ったところ、交互作用が有意であり、C1-C2において、正答<誤答であった。なお、各条件の反応パターンは、平面空間上で学習およびテストした場合と同様であった。

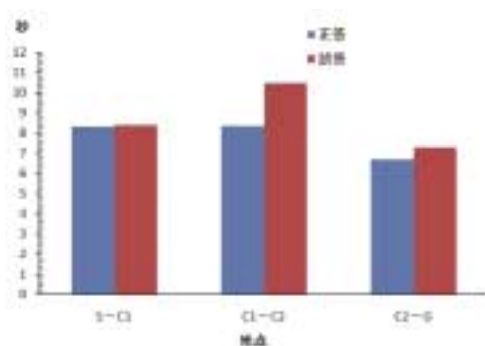


Figure 10. 平面空間上で学習し実空間内でテストした条件における正答・誤答およびチェックポイント条件の関数としての反応時間(n=22)

参加者が正答であった場合には、テスト時に周りを見渡したり振り向いたりせずにゴール地点まで移動した。誤答であった場合には、テスト時に周りを見渡したり振り向いたりして確認していた。平面空間上で学習した場合には、反応時間のパターンおよび正答・誤答のパターンは類似していた。テスト条件にかかわらず平面空間上で学習した場合には、参加者は共通の符号化方略を用いていたと考えられる。おそらく、平面空間上の情報を1つのパターン図形として符号化していたものを、弁別手がかりを使わずに検索していたと思われる。

実空間内で学習し平面空間上でテストした条件の分析(阪脇)

同様に正答および誤答数の中ぐらいの13名を分析対象とした。各チェックポイント条件における正答・誤答別にした反応時間の平均値を Figure 11 に示す。2要因分散分析を行ったところ、チェックポイントの主効果のみが有意であり、交互作用は有意ではなかった。

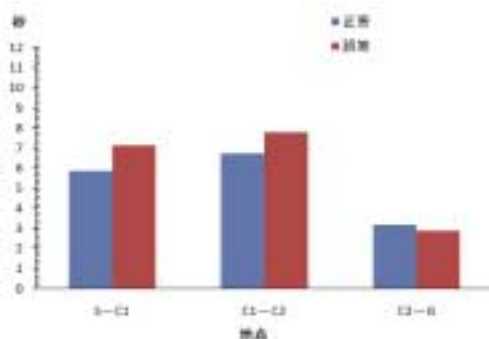


Figure 11. 実空間内で学習し平面空間上でテストした条件における正答・誤答およびチェックポイント条件の関数としての反応時間(n=13)

参加者が正答であった場合には、実空間内での学習時に、チェックポイントで立ち止まり棒をあげていた。これに対して、参加者が誤答であった場合には、実空間内での学習時に、チェックポイントで立ち止まらず棒を上げないことが多かった。そのかわり、誤答であった場合には、学習時に周りを見回したり後ろを振り返ったりしていた。正答時には、立ち止まったり棒をあげたりするという行動により、運動感覚的の弁別手がかりを用いる符号化が行われていたのに対して、誤答時には、視覚的の弁別手がかりを用いる符号化が行われていたと考えられる。

実空間内で学習およびテストした条件の分析(柘木)

同様に正答および誤答数の中ぐらいの20名を分析対象とした。各チェックポイント条件における正答・誤答別にした反応時間の平均値をFigure 12 に示す。2要因分散分析を行ったところ、交互作用が有意であり、C1-C2において、正答<誤答であった。なお、正答時にはチェックポイント条件の反応時間の有意差が見られないが、誤答時にはC2-Gの反応時間が有意に短くなった。

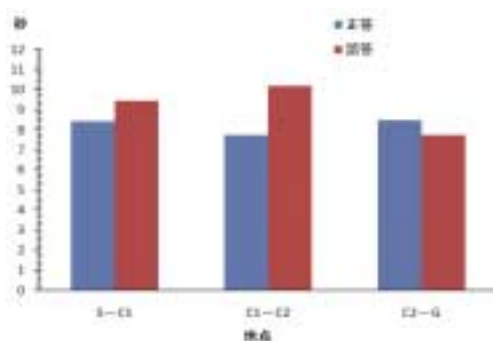


Figure 12. 実空間内で学習およびテストした条件における正答・誤答およびチェックポイント条件の関数としての反応時間(n=20)

参加者が正答であった場合には,学習時に実験者について歩くときに,2マス後方を歩きよそ見をせずに移動ルートだけを見ていた。また,必ずチェックポイントで停止した。これに対して,参加者が誤答した場合には,学習時に実験者について歩くときに,1マス後方を歩き,実験者のチェックポイントの停止に伴いチェックポイントの手前1マスで停止した。したがって,実験参加者は歩行・停止という運動感覚的弁別手がかりを用い,視覚的情報と対応づけていたと考えられる。正答した場合には適切な対応づけを行ったが,誤答した場合には不適切な対応づけを行ったと推測される。

他の3条件(学習およびテスト条件に平面空間が含まれる場合)では,C2-Gにおいて反応時間が短くなったのに対して,実空間内で学習およびテストした場合の正答においては,そのような反応時間の短縮は見られなかった。実空間内において構成される表象は,平面空間とは異なるように思われる。おそらく,ゴール地点からチェックポイント2地点,チェックポイント2から1地点,チェックポイント1からスタート地点というように,目標とそれに従属する下位目標という構造化された表象が構成されていたように考えられる。

したがって,本研究の結果に基づくと,実空間内で学習およびテストした場合には,平面空間上で学習およびテストした場合とは異なる情報処理が行われていたと結論づけられる。ただし,この情報処理の違いが,実空間に起因するのか,身体よりも規模が大きい空間であることに起因するのか,参加者の局所視野に起因するのか,参加者の身体運動を伴うからなのかは現時点ではわからない。



小川 健嗣
Kenji Ogawa



松田 樹貴
Juki Matsuda

就職活動時の証明写真に関する研究 ―背景色の効果を中心として―

1. はじめに

近年、前回の就職氷河期よりも就職が困難なことから、学生は自身を少しでも印象付けるために様々な工夫をしている。その中でも履歴書に添付する証明写真は、最初の面談に相当し、企業側に人物像を無言で伝える、あるいはアピールする情報媒体と考えられる。そこで、就職活動時の書類選考の際に使用する証明写真の重要性に着目した。

本研究では就職活動時における証明写真の評価性について、学生側と企業側の調査に基づき、学生が伝えたい印象に近い証明写真を提案する。

2. 調査

企業22名と学生110名に対して、就職活動時における証明写真の認識・評価性についてアンケート調査を行った。企業の調査結果から、証明写真でその人自身を評価している。このことから証明写真はアピール材料の一つとして重要と言える。証明写真を撮影する際に一般的に用いられている背景色は、ブルー・グレー・ホワイトであり、多くの学生が同じ背景の証明写真を使用していることになる。しかし、企業側70%以上、学生側90%以上が証明写真の背景色によって印象が変化すると回答した。この結果から背景色でその人自身の印象に変化が見られることが明らかとなり、色の違いによる影響は大きく、就職活動時における証明写真の評価性に与える影響

が高いことから、よりアピール出来る背景色を提案することにした。

3. 試料

実験者側で証明写真を作成した。背景色は実際の撮影で用いられている背景色を参考にした。被写体はモーフィングソフトを用い、男女各4名ずつの顔を混合させ、肌の色を3段階に分けた。合計48枚の試料を作成した。

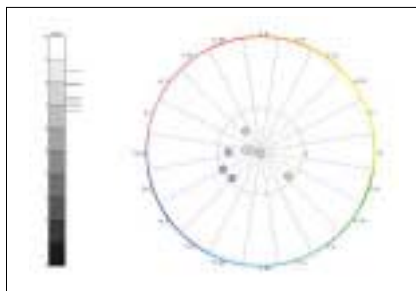


図1 資料の背景色における色相環の分布

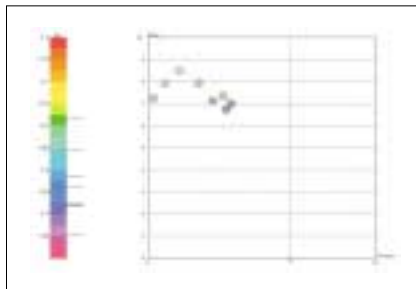


図2 資料の背景色における明度・彩度の分布

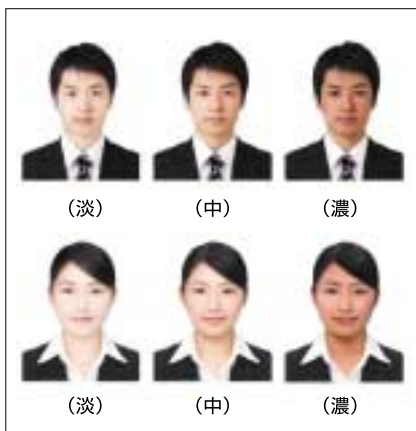


図3 作成した資料の男女の肌の色

4. 実験

<絶対評価>

作成した48枚の証明写真を見た場合に引き起こされる感情の心理因子を抽出するために、SD法の形容詞尺度に対する被験者の評価値を用い、主因子法による因子分析を行った。実験対象は、就職活動中の学生、または就職活動を予定している学生男女85名(n=85)である。

<一対比較>

因子分析の結果から、48枚の証明写真を14枚までに絞った。絞った試料を順位付ける為にシェッフェの一対比較の変法を行った。実験対象は、就職活動中の学生、または就職活動を予定している学生男女各16名(n=32)である。実験内容は、試料を2枚ずつ見せ、左の証明写真に比べて右の証明写真がどのように見えるかについて調査を行った。

5. 結果

男女の証明写真ともに就職活動時に一般的には使われていないグリーンの評価が高かった。一方、広く使われているグレーの評価が低いことが分かった。企業および学生のアンケート調査結果から最も高く評価されていたブルーに対し、この実験では、高い評価結果は見られなかった。また「清潔感がある一清

潔感がない」の項目ではホワイトの評価が高く、これは一般的に白から連想される「清潔」からこの結果につながったと考えられる。被験者(女性)ではピンクの評価が高く、一般的に広く使われているブルー・グレー・ホワイトとは異なる結果となった。

6. まとめ

- 1) 履歴書において証明写真が書類審査の際、企業の約30%以上が判断材料の一つとして影響があると認識していることから、評価性の高い証明写真を用いることが重要である。
- 2) 就職活動時の証明写真の背景色として、ブルー・グレー・ホワイトが一般的に広く用いられている。しかし、背景によって被写体の評価性に変化が見られたことから、撮影される側の伝えたい印象などを選択出来ることが考えられる。
- 3) 心理因子の抽出の結果より、どの背景色に対しても中間色として作成した肌の色が適していることと、一般的に広く用いられていた背景色のグレーの評価性が低いことが明らかになった。
- 4) 一対比較によって明らかになったように、証明写真(男)ではグリーンの背景色の評価性が高く、証明写真(女)ではピンクの背景色の評価性が高く見られた。この結果から男性ではグリーンの背景色、女性ではピンクの背景色を用いれば、自分をよりアピール出来ると考えられる。



図4 提案 男女別の背景色



河合 謙至
Kenji Kawai



寺西 祐人
Yuto Teranishi



峯廻 雄一
Yuichi Minemawari

冒険遊び場の実践を通じた地域への働き掛け

I.はじめに

冒険遊び場は「自分の責任で自由に遊ぶ」ことをモットーに、子どもたちが自分で作る遊び場である。

本報は、「1日冒険遊び場」の実践を通し、地域の人々に「冒険遊び場」を認知して頂き、地域で「冒険遊び場」が開催されることを目的とした取り組みである。

II.取り組みの記録

表1に取り組みの経緯を示す。冒険遊び場の開催に際し、いくつかの遊び場を体験すると共に、プレーリーダー^{*1}のためのレクチャーを実施し、関心のある学生に参加を呼びかけた(延べ30人が参加)。また、開催前に近隣3小学校で校長先生に冒険遊び場の主旨を説明すると共に、作成した

表1 取り組みの経緯

日付	場所	内容
8/20	リョットトン	冒険遊び場・見守り体験
8/22	西宮ふれあいパーク	冒険遊び場・見守り体験
8/26	西宮ふれあいパーク	冒険遊び場・見守り体験
8/26	徳島大学	レクチャー「子どもの心と体」
10/23	徳島大学	レクチャー「子どもの心と体」
10/23	徳島大学	第1回「日冒険遊び場」(平日)
10/24	徳島大学	第2回「日冒険遊び場」(平日)
11/1	徳島大学	第3回「日冒険遊び場」(平日)
11/12	西宮ふれあいパーク	第4回「日冒険遊び場」(平日)
11/26	徳島大学	第5回「日冒険遊び場」(平日)
12/1	徳島大学	第6回「日冒険遊び場」(平日)
12/1	徳島大学	第7回「日冒険遊び場」(平日)
12/1	徳島大学	第8回「日冒険遊び場」(平日)
12/1	徳島大学	第9回「日冒険遊び場」(平日)

*1 冒険遊び場には欠かせない存在。
子どもの見守りや遊び場の整備が主な役割。

ビラの配布を依頼した。

10月22・23日大学祭で「1日冒険遊び場」を実施した(場所:大学内テニスコート)。場所柄遊び内容の制約があったためシャボン玉、水遊び、砂場、ダンボール工作、ボール遊び等を用意した。最も人気があったのは水遊びであった。高校生と幼稚園児と一緒にボール遊びを楽しむなどの異年齢交流も見られ、普段公園では目にしないような自由な遊びができる環境を提供することができた。その時にとったアンケート調査から、大学近隣の子供もたちは、年齢を問わず家の外で遊びたいと思っているが、実際は家の中で遊ぶことが多く、その傾向は年齢が高いほど顕著であることが把握できた(図1・2)。

11月、場所をグラウンドに変え2回目を開催した。この日の目的は、今後の活動を地域



幼児から高校生と一緒にドッチボール。異年齢交流が多く見られた。



ダンボールの作品を持って帰りたい子が続出、親が根負けして持ってきた。

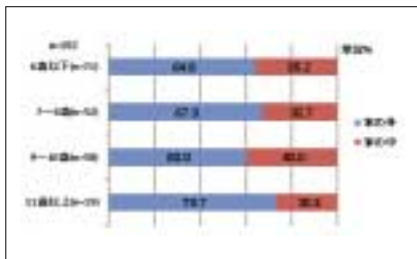


図1 どちらで遊ぶのが好きか

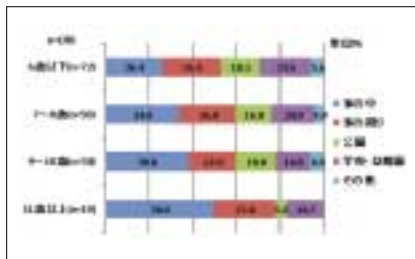


図2 年齢別、よく遊ぶ場所

の方と相談することである。

テニスコートよりもスペースが広いこともあり、走り回る子どもが多かった。人気の水遊びもホースを使った大掛かりなものに変化していった。その間、大人は、「子どもと遊び～その重要性和親の役割～」をテーマに米山さん(にしのみや遊び場つくり会代表)の講演を聞き、次回開催に関して話し合った。

1月、豚汁作ろう会第3回冒険遊び場を開催した。場所は大学グラウンド横のスペースである。事前の話し合いに来ていただいた保護者(特にお母さん方)に約100人分の豚汁を作っていたいただいた。

2月、焼き芋をメインとした第4回冒険遊び場を開催した。参加者は前回より多く子どもたちだけで40人程度、保護者をいれると60人ほどに参加いただいた。お父さんに頑張っていたいただき60本の芋を焼いてもらった。前回整備した砂場に大きなシャベルを置いて

おいた所、小学校高学年を中心に砂場遊びが人気であった。また、定期開催についての話し合いも行い、4月以降月1回のペースで開催することが決まった。

Ⅲ.まとめ

冒険遊び場を実現するために欠かすことができないのが、地域の大人たちの協力である。なぜなら、冒険遊び場は地域で運営し、育てていくものであるからだ。

冒険遊び場を広める第1歩として、私たちは4回に渡って冒険遊び場を開催し、地域に根ざすためのきっかけを作った。3月には地元香芝市との話し合い、また、NPO法人主催のシンポジウムでの発表を保護者の方も一緒に参加する。4月以降には月1回のペースで定期開催することも決定した。これを機に、冒険遊び場が地域の遊び場として定着することになれば喜ばしい限りである。



ホースを使ったダイナミックな水遊び。水遊びは一番人気。



ホクホク、焼き立ての焼き芋。



お母さん方の協力により、100人分の豚汁を作った。



子どもたちが外で遊んでいる間に次回以降の打ち合わせ。



櫻井 駿也
Syunya Sakurai



西村 信彦
Nobuhiko Nishimura

通所型幼老複合施設の施設計画に関する調査

1. 研究の背景

幼老複合施設は、子ども施設と高齢者施設が併設された施設のことを指す。本研究では通所型の幼老複合施設の取り組みの現状を把握し今後の発展に資することを目的とする。

2. 調査方法

近畿圏5か所富山県3か所の計8か所において、事前に送付したアンケート用紙を用いたヒアリング調査を実施した。

3. 考察

施設概要を表1に示す。昨年実施した入所型との比較を行うため、昨年分も再掲した。

I. 計画交流と自然交流

計画交流の頻度は、比較的大きな施設で回数が多い。複合施設の規模を活かしたクラブ活動や地域の方も巻き込んだイベント等が開催されている。幼老複合施設の多くは、計画交流は自然交流への橋渡しであると考えている。しかし、計画交流の頻度が高いか

らとって必ずしも自然交流が多いとは限らない。自然交流が「よくある」と回答しているのは一体型の小規模な施設に多く、計画交流の頻度より空間の共有が自然交流の頻度に関わるものと考えられる。

II. 建築計画

空間接合は浅沼による分類^{*2}に基づく。積層型の『B』『E』は子ども施設と高齢者施設で階が異なるので、プライバシーは保たれるが、交流の際は移動が必要となり、利用者やスタッフに負担となる。混在型の『C』『D』はともに複合施設であり、1階にデイサービス、上階に特養が設置されている。子ども施設とデイサービスの関係だけで見ると、同じ階なので積層型よりは移動の負担が少なく、自然交流のきっかけが作りやすいようだ。一体型では利用者は共有スペースで常に顔を合わせているので、顔なじみの関係は構築しやすい。ただし、体調の悪い高齢者が静かに静養できる静養室の確保が重要である。それが無理な場合は、『F』や『H』のように別に子ども用のプレイルームが確保されている

施設名称	A	B	C	D	E	F	G	H
施設分類	一体型	積層型	積層型	積層型	積層型	積層型	積層型	一体型
計画交流の頻度	少ない	多い	多い	多い	多い	多い	多い	少ない
自然交流の頻度	少ない	多い	多い	多い	多い	多い	多い	少ない
施設用途	保育園	保育園	保育園	保育園	保育園	保育園	保育園	保育園
上層/下層	保育園/保育園	保育園/保育園	保育園/保育園	保育園/保育園	保育園/保育園	保育園/保育園	保育園/保育園	保育園/保育園
空間接合	一体型	積層型	積層型	積層型	積層型	積層型	積層型	一体型
空間接合の図								

表1 施設概要と空間接合



對馬 亮
Ryo Tsushima

大学生の生活環境におけるにおいに関する意識調査

【はじめに】

我々を取り巻く生活空間には、好ましいにおいや好ましくないにおいが存在し、においのない空間はまずない。近年では、単に不快なおいを消臭・マスクングするだけでなく、香りを付加することに重点を置いた商品も数多く開発され、我々の生活の様々な場面で使用されている。においには好みがあり、個人の快適性に与える影響も大きいと予想される。そこで、大学生を対象として、においに関する意識や香りの付加された商品に対する興味や評価を調査することとした。

【調査の概要】

調査対象：奈良県内共学大学生・兵庫県内女子大学・短期大学生

調査方法：質問紙法による集合調査

有効回答数：232(共学男子51・共学女子106・女子短大125)

調査期間：2011年12月

調査項目：においに敏感かどうか、自分や他人のにおいが気になる度合い、気になる生活臭、においの記憶、においへの対策等

【結果・考察】

においに敏感かどうかについては、女性の方が敏感と回答する割合が若干高く、敏感と敏感でないとの回答はほぼ同程度であった(図1)。他人のにおいや、自分のにおいに対する意識では、男女共に、「とても気になる」と回答する割合が高く、「少し気になる」を含めると80%程度となり、体臭に対する意識の強さがうかがえた。また、男性は他人のにおいが気になるのは50%程度だが、自分のにおいが気になるのは70%と差があり、両者ともほぼ同等の回答であった女性と傾向に差異がみられた(図2・図3)。どのような時ににおいが気になるか尋ねたところ、男女共に、自分の周りに大勢の人がいる時、暑い季節、運動した時という回答が多かった。また、家・自室においてもっとも気になるにおいは、料理や生ゴミが30%、次いで自分の体臭が20%、他人の体臭がそれに続いた。この結果からも他人より自分のにおいを気にする傾向にあることが分かった。

なんとなく漂っている家庭独特の生活臭

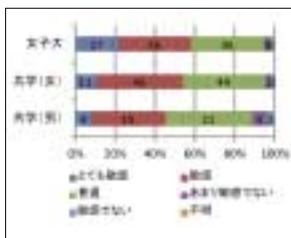


図1 共学・女子大別 においの敏感さ

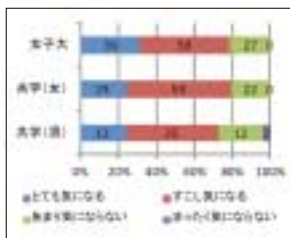


図2 共学・女子大別 自分のにおいが気になるか

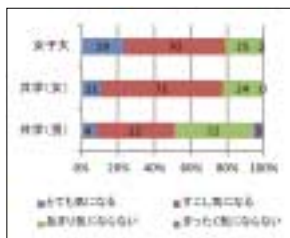


図3 共学・女子大別 他人のにおいが気になるか

が気になるかどうかについては、においに敏感な人は70%程度が気になるかと回答し、においに敏感でない人は30%程度と差がみられた(図4)。また、生活臭が気になるかどうかには、家に滞在する時間の長さとも関係があり、睡眠時間を除く家での滞在時間別にみると、5時間~10時間滞在する人では65%程度が気になるかと回答し、事例数は少ないが10時間以上滞在する人では8割程度と気になる割合が高かった(図5)。生活環境で気になるにおいを消す理由を複数回答で尋ねたところ、「自分自身が気持ちよくなりたい」と30~40%が回答し、男女問わず最も多かった。このことから、におい環境の良さが自分自身の快適性に影響していることがわかる。次いで、回答が多かったのは「来客への配慮」、「身だしなみ」、「好きな香りに包まれたいから」等で、15~20%が回答した。

他人が付加しているにおいについては「どちらもない」との回答が男女問わず50~60%と最も多いが、「好き」と「嫌い」の回答がほぼ同程度であり、香りを付加することが、他者にとって好ましいとは限らず、使用する際の配慮が望まれる。

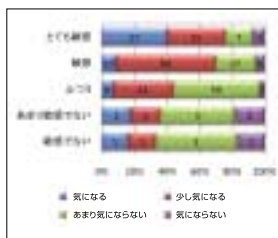


図4 おいへの敏感さと生活臭が気になる程度

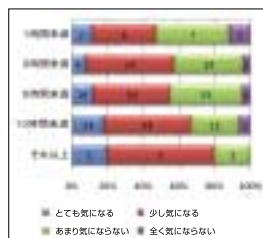


図5 家での滞在時間と生活臭が気になる程度



図6 性別の快適と感じるにおい環境

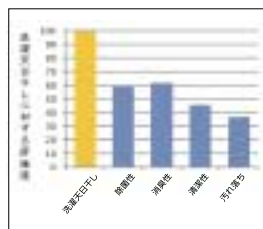


図7 洗濯に対する布製品用除菌消臭スプレーの評価

心地良いと感じる生活環境においても、男女ともに香りのある生活、日常的な生活臭のある生活、何にもおわないに意見が分かれ、評価の多様性がうかがえた(図6)。また、空気の汚れやにおいが気になった時、まずどうするかについては、60%が窓開け換気と回答したが、芳香・消臭剤を使用するという人も10%程度いた。

近年急速に普及した布製品用除菌スプレーについては、約90%に使用経験があり、2~3日に一度以上使う人も20%を占めていた。洗濯に代用できるような広告もあるため、その評価を「洗濯して天日干した時を100」とし、①除菌性②消臭性③清潔性④汚れ落ちの4項目について数値で評価してもらった平均値を図7に示す。除菌性と消臭性は60程度、清潔感が45程度、汚れ落ちについては最も評価が低く、35程度にとどまっており、どの項目も洗濯ほどの評価ではなかった。

新たに発売されている様々な香り商品(服にスプレー・香りを付加するシート・香り重視の柔軟剤等)は、女性が男性より興味関心が高かった。

【おわりに】

大学生の多くは自分のにおいへの意識が強く、また、におい環境が快適性に及ぼす影響がうかがえた。図8に示すように、においは記憶の中に思い出として残るものでもある。今後におい環境についてさらに考察を深めたい。

謝辞 調査にご協力下さった学生の皆様に御礼申し上げます。

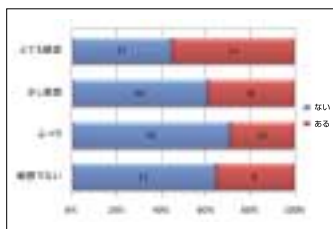


図8 おいへの敏感さと思い出に残るにおいの有無



村上 友梨奈 水谷 竜史 福本 大将
Yurina Murakami Ryuji Mizutani Daisuke Fukumoto

畿央大学における省エネ・環境意識の実態調査と改善提案

【はじめに】

近年、地球温暖化が問題となっており、世界的にCO₂削減に向けてさまざまな取り組みがなされている。特に日本では2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖大地震以降、省エネルギーに対する意識が非常に高まっている。しかし、学生生活を送る過程で、学内には、改善の余地がたくさんあると感じた。本研究では、学生のエコ意識の調査や、学内の巡回調査を経て、学生のためになるようなエコを検討し、提案する。

【研究方法】

学生意識アンケート調査

調査対象: 畿央大学生

調査方法: 質問紙法による集合調査

調査期間: 2011年7月2日～7月15日

有効回答数: 584 (男性211人、女性367人)

調査項目: 学年、学科、性別、個人の暑さ寒さに対する体質、エコに関する興味関心、震災による省エネ・節電意識の変化、普段実践しているエコ活動、学内のエコ活動に対する意見、エコ活動の今後の取り組みに対する意見、学内における改善が必要と思われること、学内のリサイクルに関する認知度等

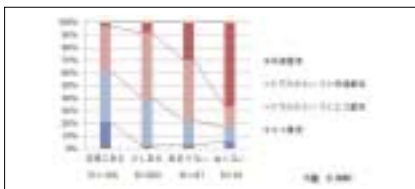


図1 エコ興味・関心とエコ・快適重視

学内巡回調査

調査対象: 人感センサー未設置のトイレ16箇所および教室27室(講義室・PC教室・実習室・ゼミ室等)

調査期間: 6月27日、7月4日、5日、6日、14日の5日間
調査項目: 照明使用状況、エアコンの使用状況・設定温度・風量、窓・ドアの開閉状況、部屋の使用人数

【結果・考察】

学生意識調査より調査対象584人のうち、大学での省エネ・エコへの取り組みの改善が必要と考えている人は7割以上であった。また、エコに対する興味・関心を持っている人は8割以上と高い割合であったが、その中の5割以上が、普段は快適性を重視した生活をしてきた(図1)。よって、極端に快適性を損なわないような学内エコへの取り組みを検討することが協力を得る上で重要と考えられた。エコについての興味・関心が高い人ほど、エコ活動に協力的な回答率が高かった。今回の大震災を機にエコを大いに意識するようになったと29%が回答し、ある程度意識するようになったと52%が回答した今こそ、学内でエコ活動を推進し、エコを推進しやすい環境を整えることが重要と考えられる。学生の意見としては、電気・冷暖房のつけ直し、冷暖房の設定温度、ミスプリントの再利用等に改善が必要と

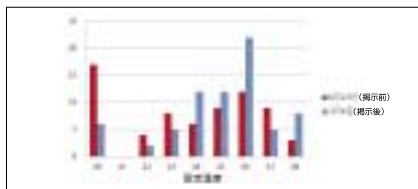


図2 節電ポスター掲示前後の各設定温度件数

の意見が多く、これらの意見を生かしていくことにより、本学にエネ・エコ活動を少しずつ根付かせられるのではないかと考えられる。

学内巡回調査より、エアコン設定温度は26度が最も多く、次いで20度設定が多かった。20度設定は10時30分(1限目終了時間)に一番多く、朝から設定可能な最低温度にしている現状が明らかとなった。しかし、節電をよびかけるポスターの掲示前後では設定温度の分布に改善がみられた(図2)。教室の照明は、ほとんどが全点灯で利用されていた。その半分は5人以下で使われていた。トイレの照明は640事例調査し、59%が点いていた。日中の明るい時間帯でも点灯しており、男女での差はほとんどなかった。授業がよく行われているE棟L棟では76%が点灯していた。

【ポスター掲示によるトイレの照明検証】

巡回調査によってトイレの照明について、使用者がいないにも関わらず、また昼間の十分に明るさがある時間帯にも点灯していることが明らかになった。そこで男子トイレのみポスターを掲示し、個室とスイッチ付近あるいは、目のつきやすい位置にオリジナルのポスターを掲示し、どのくらい効果があるのかを女子トイレとの比較により検証した。ポスターには消灯の推進と暖房便座のフタを閉じてもらうようお願いを記載した。

調査概要

調査期間 掲示前: 12月7日～9日
 掲示後: 12月14日～16日 計6日間
 調査時間 10時40分・13時00分・14時40分
 16時20分・18時00分 1日5回
 調査対象 L棟 1,2階 E棟 1,2階 計4箇所
 結果

オリジナルのポスター掲示前と掲示後では、



図3 オリジナルポスターと掲示前後のトイレの照明点灯件数

点灯率は半減しており、調査時間帯によらず改善が見られた。特に日中の明るい時間帯での点灯率が減少した。ポスターを掲示しなかった女子トイレでは両期間比べても点灯率に差はほとんどなく、掲示の効果が検証された。現状では退室時に照明スイッチが死角になるため、目につく位置にポスターを掲示したことが効果につながったと考えられる(図3)。

【ペットボトルキャップ回収容器】

本学では、ペットボトルの分別回収は数か所で行われているが、ペットボトルはキャップと分離しなければ資源としては成立しない。しかし、本学でのキャップ回収は、C棟のボランティアセンター前と、隣接する自動販売機横という、近距離に2か所設置されているのみであったので、ペットボトルとキャップの分別回収率を上げるために、ペットボトルキャップ回収容器をデザインして製作、設置した。回収容器の材料は再資源化できるように、使用済みのペットボトルとした。容器が透明なので、キャップが投入され、堆積すればカラフルで回収物自体もデザイン要素になり綺麗である。また、組立の際には、リサイクル性を考慮し、接着剤等は使わず、必要最小限の釣り糸と少量のテープのみを使用した。また、4本の容器の高さのバランスに、黄金比を用いてデザインした。溜まったキャップを回収しやすいように、構造が複雑な上部ではなく、底部から容易に回収できるようにし、ペットボトル回収箱のすぐ横に設置し、分別回収が促進されるよう考慮した(図4)。

謝辞 アンケート調査にご協力いただいた学生の皆様、聞き取り調査にご協力いただいた学内関係者の皆様、誠にありがとうございました。



図4 ペットボトルキャップ回収容器

拘って、拘って

しんどい

辛い

でも、楽しい

大丈夫、
少しずつ

進んでいくから



制作



奥本 紗弓
Sayumi Okumoto

村田ゼミ

青い薔薇の奇跡

コンセプトは「青い薔薇」です。花言葉は「奇跡・神の祝福」です。
昨年、東日本大震災により大きな被害が起りましたが、
この青い薔薇のように人の手により明るくキラキラとした
未来の花を咲かせることをイメージしました。



たくさんの想いと



決意をこめて



頑張らせてくれて
ありがとう

感謝を伝えたい



岡村 若奈
Wakana Okamura

加藤ゼミ

Wood Village —暮らしの中の家具館—

Wood Villageでは、自らの手で植えた木々が育ち、一度立ち寄っただけで家具に関する全てが分かる、そんな学べて遊べる楽しい空間である。家具を大切に永く使い続けられるように、そして人々の住環境レベルの向上を手助け出来る空間にしたいという想いで設計をした。





小川 洋平
Yohei Ogawa



澤田 浩孝
Hirota Sawada

村田ゼミ

広がるおいねっとの輪 —節電・エコ・おいね—

おいねとは、山添村にかつてあった防寒着です。昨年度、卒業生の道幸さんの研究で復活したおいね。今年、おいねを地元山添村と世間へ広める活動をしてきました。広がれおいねっとの輪。





北出 裕也
Yuya Kitade

三井田ゼミ

Education Cell

有機的に成長・変化していく建築。
細胞(cell)である、部屋の配列や形の変化が
建築全体の新陳代謝(metabolism)につながる。
建築は、人と同様に成長していく。





友田 実希
Miki Tomoda

藤井ゼミ

キトラ古墳 しじん 四神公園

建築の外観は飛鳥時代のを引用し古代を感じられる空間を、内部空間や建築構造は現代的なものをを用い快適な空間を計画。キトラ古墳は、石室の四壁を四神が守護している古墳であり、四つの区画に分けて配置した。



歴史居住区—玄武

鎌倉時代の遺構が暮らしていた
聖光寺遺構の再建

守護神：玄武 北は山、南をを守る神

散策・休養館—青龍

キトラ古墳を眺めることのできる緑
林影の広がる喫茶店と食事処

守護神：青龍 東は川を守る神

キトラ古墳

天武天皇の皇子や側近の貴宮が埋葬
されているとされる古墳
石室内部の四壁に四神の青龍、白虎、
朱雀、玄武が描かれる。

体験学習館—朱雀

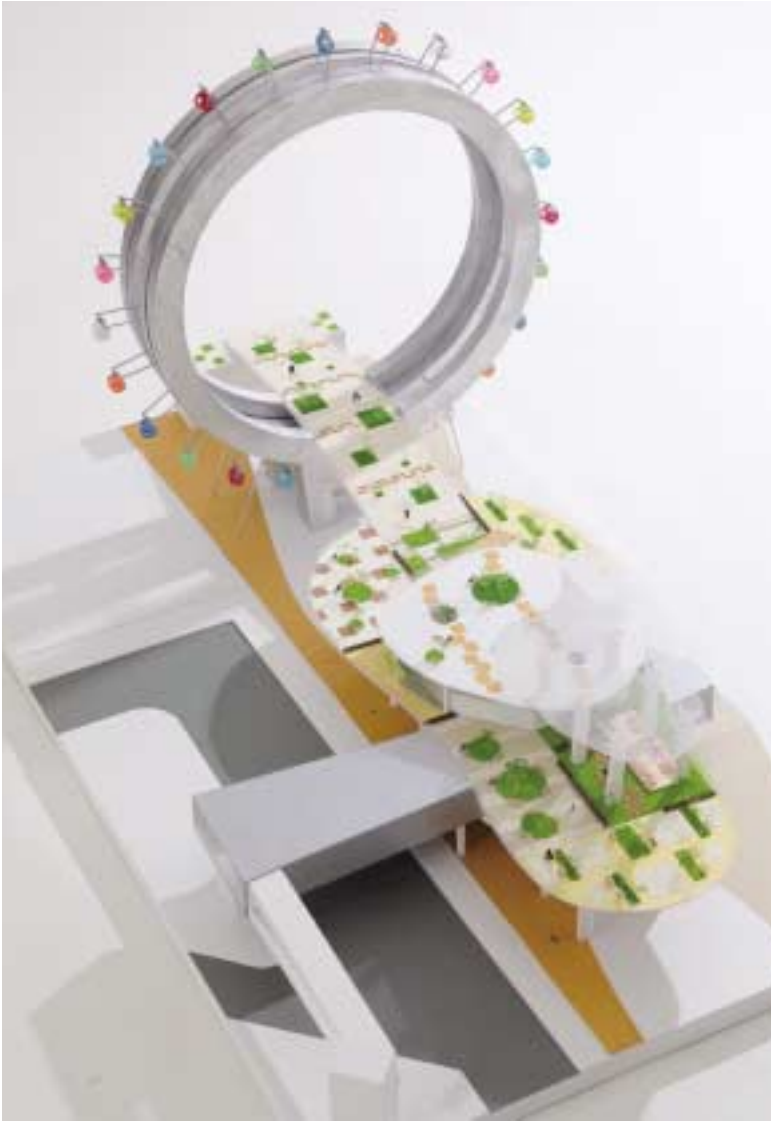
古内の構造や行事体験の場
イベントを行うホールや観覧の場もある。
外観は拝堂寺・知能館を引用

守護神：朱雀 南はくば地を守る神

歴史資料館—白虎

歴史的資料の展示の場
1階に研究館、2・3階に吹き抜けの観覧場
外観はエビノコ館を引用

守護神：白虎 西は大途を守る神

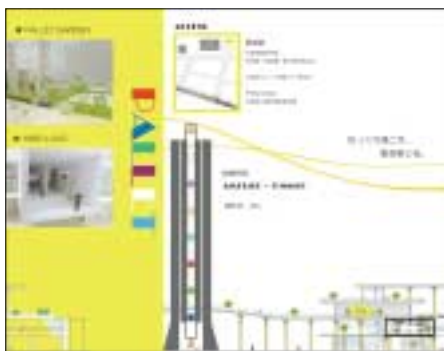


蛭本 章子
Akiko Hirumoto

加藤ゼミ

商 WIND「商業施設+風」

この商業施設は、風を「肌で感じる」「見て感じる」さらに「建物自体で感じる」ことをテーマにした。風が通るような透明感のある外観。中央の通路は、通路であり風が吹き抜けるための窓。様々な場所で常に新しい風を感じながら、人は大切な時間を過ごしていく。





チェコ テルチ



アメ村 三角公園



国立国際美術館



フィレンツェ



瀬戸内海 アートの海 直島

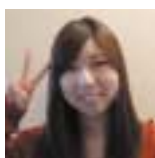


尾内 愛
Ai Ouchi

藤井ゼミ

点在 ~美術館からまちへ~

ひとつ
ふたつ
みっつ...
輝くものはどこにでも
まちがアートで溢れますように



小野山 静香
Shizuka Onoyama

中山ゼミ

Celebration

結婚式は結婚する二人を祝福する儀式であり、そのあるべき姿は「祝う」場所であること。そこで私は「祝う」をコンセプトに結婚式場を計画した。

式場は厳肅なイメージで、ピラミッド型の屋根と神殿のような階段状の内部空間をデザインした。披露宴会場は楽しむことをイメージし、座席上部の空間に布のスクリーンをデザインした。



葛井 愛
Ai Katsui

村田ゼミ

草木で染める浴衣 ～ママと娘の色重ね～

昔の人は布を染めるのに草木で染めたという。その色は何とも素朴で懐かしさと温かさを感じる。絞り模様をほどこし、草木の色を重ね、親子で揃って着ることのできる浴衣をこの研究で見つけ表現した。



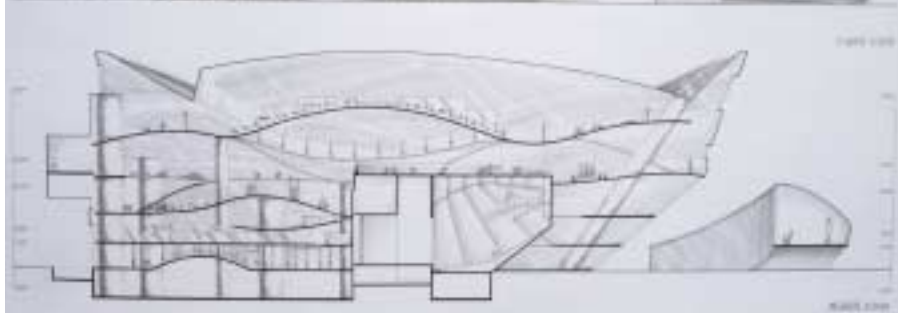
勝瀬 勇登
Hayato Katsuse

中山ゼミ

ダンボール椅子C3

ダンボールの波目を利用したデザインにしました。また、3通りの座り方をすることができます。

C3とはCorrugated(波型の)Cardboard(ダンボール)Chair(椅子)の頭文字と、3通りの座り方からきています。



金井 昂大
Kohdai Kanai

藤井ゼミ

K

自然には直線も平面も存在しない。
建築もそろそろ、定規の呪縛から逃れるべきではないか。
坂道を上り詰めると風景が開け、
丘で窪地で思い思いにくつろぎながらアートを眺める。
そんな美術館を作りたいと考えた。



高井 乃利古
Noriko Takai

中山ゼミ

和 ～銭湯～

「心が和む・気持ちが和らぐ」空間を作りたい。そんな思いで、古くから日本人に親まれてきた「銭湯」を中心に、新しいコミュニケーションの場を提案。社会的要因・身体的要因・心理的要因の3つの側面から、子供からお年寄りまで気軽に集まって楽しめる「銭湯」を制作しました。



田上 千穂
Chiho Tagami

村田ゼミ

藍の引き算

生活を豊かに、華やかにと、人々は「もっと、もっと」と、足していくことが常になっている。足していく生活から余計なものを削ぎ落としていく、そんな一歩としての美しさを追求した。



中村 雅也
Masaya Nakamura

加藤ゼミ

シースールーム ～とある寿司屋の空間分割～

3m×3m×3mの箱が無数に並び、一つ一つが違った表情を持つ。
その表情が干渉し合い、職人のパフォーマンスや食事風景、
屋外風景の片鱗を透かし、覗かせる。
不規則に並ぶ「箱」と、それらの持つ「表情」が
シースルーな空間分割を演出する。



西澤 法子
Noriko Nishizawa

加藤ゼミ

本の公園

本の匂い、重さ、ページをめくる感覚…実際に手に取ってみたいと感じられない。ただ読むのではなく五感を使って読書を楽しむ本との触れ合いの場として「たくさんの緑の中で好きな場所で読書を」「新たな本との出逢い」ができる自由で解放的な「本の公園」を提案する。



橋田 英里子
Eriko Hashida

村田ゼミ

MUSE in Flower Garden ～レースのお花に囲まれて～

今年のKDKコンテストのテーマは「ミュージズと出あう」。大学生活でこんなに時間をかけ、これほどの大作を作ったのは初めてでした。ドレス制作を通して一つの事に真剣に取り組む大切さを感じました。

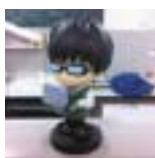


林 克彦
Katsuhiko Hayashi

三井田ゼミ

寺 ～技術を後世に～

現代では、新しくお寺を造る事が減っている。長い間に多くの人々によってつみかさねられてきた木造建築とその技術がなくなってしまうのはあまりにもつたいない。そこで、軸組みのまま残し古建築の技術を後世に繋ぐ。



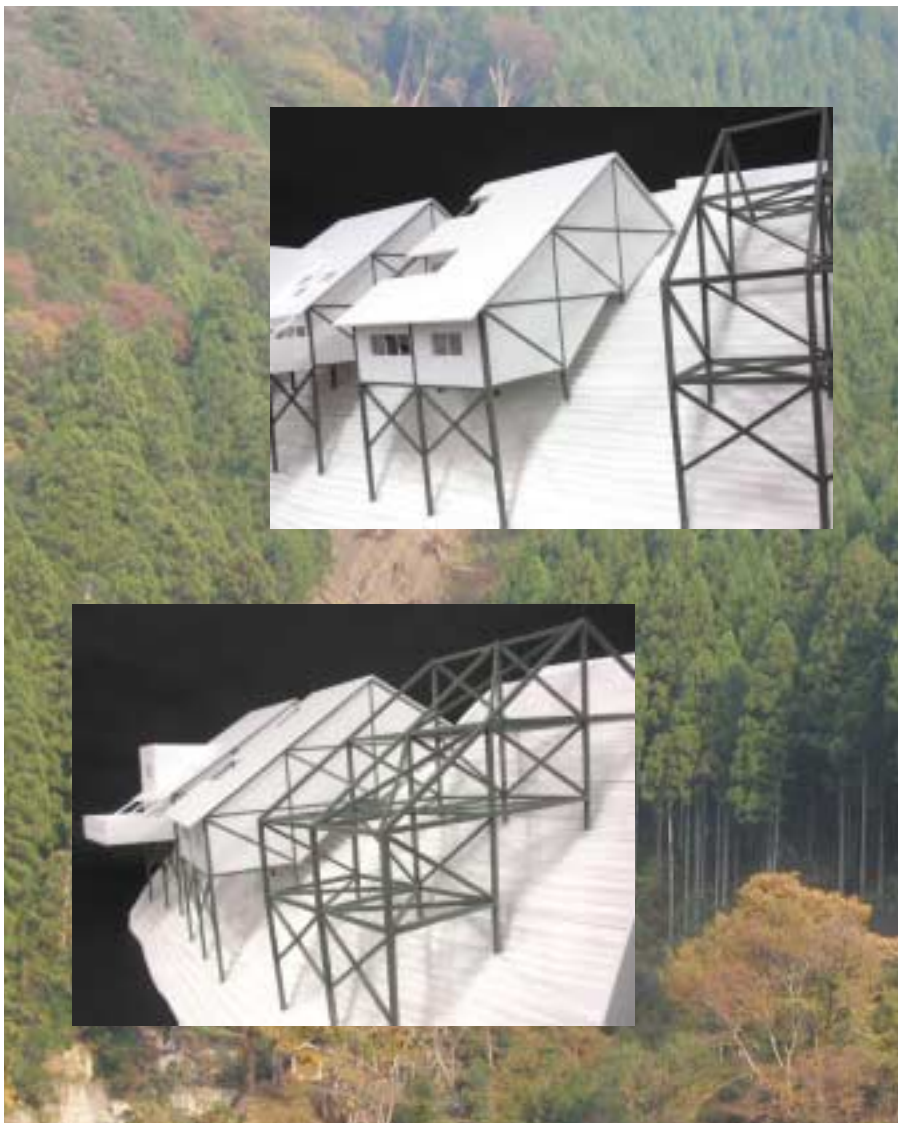
番場 大平
Taihei Banba

三井田ゼミ

葛城の宿

奈良県御所市名柄にある、現在廃屋の郵便局を地域の高齢者が営む民宿にし、葛城の道を通るハイカーが気軽に泊まれる民宿を計画した。

敷地の中の民宿のはなれには格子や虫小窓など、町屋を意識した作りにした。



福島 和輝
Kazuki Fukushima

藤井ゼミ

鉄骨スkeletonによる斜面地住宅のケーススタディ

2011年東日本大震災で壊滅的な津波被害を受けた東北地方。高台への移転が望まれているが、高台には十分な平地はない。そこで、斜面地に鉄骨スkeleton設置し住宅をはりつける手法をとる。このとき住宅デザインは、スkeletonの形に誘発される。



松井 愛
Ai Matsui

中山ゼミ

Fitness Park ～フィットネス+自然～

公園+フィットネスクラブで新しい空間を計画した。中心は室内公園になっており、反時計回りにウォーキングやランニングが行える。また、所々に各部位の筋肉に効くマシンを配置し初心者や高齢者にもわかりやすくした。五感で楽しめ、より運動を身近で感じる事が出来る空間。それが『Fitness Park』である。

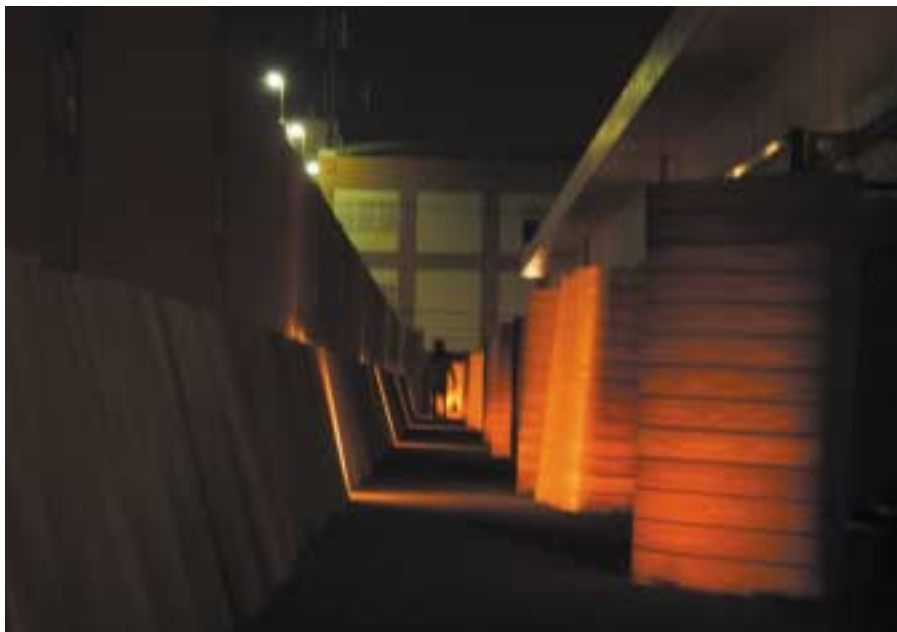


松谷 美紀
Miki Matsutani

村田ゼミ

真綿の可能性 ～幸せを運ぶ SILK WORM～

1個の貴重な繭から作りだされる真綿の奇跡。小さな卵から糸にもなり綿にもなる。そして布にも姿を変える。真綿に色をつけ、ひきのぼし、糊をかけ、丸めたり、絞ったり。そこから花になり、ドレスになる。



八木 逸斗
Hayato Yagi

加藤ゼミ

つむぐ インスタレーション ～光に触れる露地～

大学の50mの露地を光と木を使いインスタレーションを試みた。
『直線』と『曲線』によって支配された空間は果てしなく続き、人々は一歩また一歩力強く歩み続ける。
私たちはもう少し少ない光で生活できるのではないか。

インスタレーション：空間全体を作品として体験させる芸術



山本 太郎
Taro Yamamoto

加藤ゼミ

KASETSU JUTAKU「みんなの家」

プレハブの箱を並べただけの住宅ではなく、調湿機能と断熱性を生かした板倉工法の木造住宅の提案と昔から続いているコミュニティを分断を防ぎ、自然と新しいコミュニティが形成されるカタチを提案。

Kio

2012.3.3sat-3.4sun

会場：奈良市ならまちセンター

畿央大学健康科学部人間環境デザイン学科

卒業研究・作品展

Graduation Work 2011
The Exhibition of



会場：奈良市ならまちセンター
企画展示ギャラリー ほか

主催：畿央大学健康科学部人間環境デザイン学科

会期：2012年3月3日（土）9：30～18：00

4日（日）9：00～18：00

※会期は既に終了致しました。たくさんのご来場有難うございました。

制作風景



東ゼミ 生活環境学・住居学・人間工学
加藤ゼミ インテリアデザイン、住宅設計、
家具デザイン、店舗デザイン、
環境デザイン

金敷ゼミ 認知心理学
齋藤ゼミ 福祉のまちづくり・住居学
佐藤ゼミ 色彩学、街並みと景観





中山ゼミ ユニバーサルデザイン
インテリアデザイン
プロダクトデザイン

藤井ゼミ 住宅・建築・都市等の
建築関連分野

三井田ゼミ 建築・まちづくり計画

村田ゼミ 生活科学

李ゼミ 色彩学
インテリア・エクステリアに
おける色彩計画





畿央大学 健康科学部 人間環境デザイン学科
第6回 卒業研究講評会

全体発表会：2012年2月13日 10:00~16:00

選抜発表会：2012年2月14日 13:00~16:00

場 所：L101教室

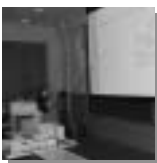
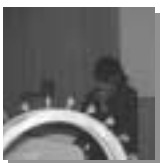
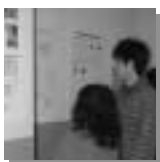
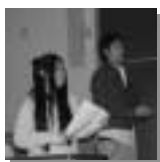




学長賞：植村文彦 廣瀬 学 堀川裕亮

優秀賞：奥本紗弓 岡村若奈 小川洋平 澤田浩孝

北出裕也 友田実希 蛭本章子



講評

みんな、よく頑張った。

徹夜の苦しさにもめげず、よく最後までがんばりとおした。きっと、心地よい充実感を味わったことだろう。

これを糧に、社会に出ても、志を立て、それぞれの目標に向かって、努力してほしい。

努力は決して君たちを裏切らない。

イソップ物語にいわく、「Where there is a will, there is a way.」。
（「水がめとカラス」より抜粋）

三井田 康記

人間環境デザイン学科 学科長

卒業おめでとうございます。

実は、皆さんが1回生の時は、正直言って手に負えないなと感じていました。

もちろん全員に対してではありませんが、一部それまでの畿央大生と異なるタイプの学生が何名かいて、授業をやりにくいなと感じていました。

しかし、上回生になってから、良い意味での変貌は著しく、成長の跡をもっとも感じた学年でもあります。その学年が卒業です。感慨深いものがあります。

おそらくこれからの数年間は、これまでの人生の中でもっとも変化の多い、もっとも成長著しい数年間になるだろうと推察します。さらに成長したあなたに、また出会えることを楽しみに、しばしのお別れです。是非、母校に足を運んで下さい。待っています。

齋藤 功子

人間環境デザイン学科 主任

入学式を済ませたばかりの皆さんと初めて授業で対面してから早や4年、授業では、授業崩壊？と、とまどう日もありました。しかし、4年間の成長が感じられる集大成が完成しました。3月、私も皆さんと一緒に卒業します。私にとっても皆さんは特別の存在です。どうぞ自信を持って下さい。やれば出来る！締め切りまでの追いこみの日々、出来上がった時の達成感を忘れないで下さい。あるいは、もっとやれば良かった！と悔いが残っている人がいるかもしれません。それに気付かれたあなたは成長したのです。

作品づくりも人生も、その歩みは同じです。「4年間で学んだことの集大成を形にする」卒業研究の教育的だご味はここに 있습니다。完成までの構想を練り、迷いながら試行錯誤、紆余曲折も成長の糧です。その中で仲間の大切さを知ったことでしょう。長い人生とは異なることが一つあります。大器晩成型のあなたであっても、卒業という「期限」があることです。あなた方はまだまだ若い！これからの人生、自分の可能性に向かって前向きに、ひたむきに、進んで下さい。ご活躍をお祈りしています。

佐藤 昌子

建築作品をつくった諸君へ

頑張った人も頑張りがれなかった人も居ました。幾つかのプレゼンテーションは脱帽ものでした。しかし、私はどの作品にも少し違和感を覚えています。一言で言うと、あなた自身の溢れる思いが見えなかったのです。プレゼン技術も必要ではありますが、何を創りたいのかどんな空間が見てみたいのか確かでない、その作品は空しい物です。少しくらい破綻を来しても構わないから、新しい提案や驚きの空間、君自身の建築への夢を見てみたかったです。

全ての諸君へ

そう、「夢」を持ってください。「夢」とは決して、「正社員になる」「資格を取る」「年金を貰う」ことなどではありません。それは生きる手段ではなく、生きる目的なのです。何のために生まれてきたのかを問ひかけ、夢を持ち、それを糧に素晴らしい人生を送られることを祈ります。

藤井 豊史

この学年の皆さんは当初かなりやんちゃな子もいて、行く末を少々心配したのですが、四年間の学びの集大成である卒業制作・論文を仕上げていく姿に成長を感じました。これまでの人生を振り返っていちばんしんどく、でもいちばん充実していたと感じてくれたら嬉しいです。

締切間際には昼夜を問わず作業を続けていた人も多かったですね。心身ともに苦しかった時には、仲間の優しさや、かけてもらった何気ない言葉や手助けに感動したのではないのでしょうか。

作品であれ論文であれ、自分自身の力で何かを創造する作業は、そう簡単なものではなく、自分が努力するのは当然ですが、それだけでは為し得ないことも学んだのではないかと思います。成長して巣立つみなさんを誇りに思います。胸を張って羽ばたいてください。そしてまた社会で活躍している様子を知らせに来てください。

東 実千代

畿央大学人間環境デザイン学科に就任して早4年がたった。つまりあなたたちと同期である。それだけに特別の感慨がある。あなたたちは卒業するが、僕は留年させていただくことにしよう。あんなにうさく落ち着きがなかった1年時のことを思うとこれほど充実した卒業作品ができるとは失礼ながら思っではいなかった。皆本当によくやった。・・・2011.3.11に襲った東日本大地震の記憶は我々の脳裏から離れることはない。記憶に残る年度であるが、卒業作品ははたして記憶に残っていくのであろうか。今年の卒業研究で1番難しかったのは採点・評価であった。極端に言えば、全てが等しく「優」でもかまわないように感じた。それほど差がないのである。私事で申し訳ありませんが学生の頃「あなたの作品はモニュメンタルすぎる」と酷評され全く評価されなかった。その悔しさはずっと引きずっている。今考えれば、先生の意見は全く正しかったし僕もその言葉をバネにしてきたのだ。真の評価は自分自身でするもの。嘘をつかず本気で作品に立ち向かったのかどうか。社会に出ても卒業作品のように真正面から挑んでほしいと切に願う。

加藤 信喜

卒業制作がやっと終わりましたね。お疲れ様でした。2月13日の作品説明の後、翌日の発表作品に選ばれるのか、再提出に落とされるのかと随分気を揉んだことと思います。確かに発表作品に選ばれるのと再提出とは心理的受け止め方に大きな差があります。でも、それぞれ個々に自分の持ち味を出している作品については、発表作品と発表作品に選ばれなかったものとの評価の差は少ないと考えてほしいです。ただ、中には楽な方法でやることを優先して考えた人もいました。逆に、再提出ではないのに、自分からやり直したいと申し出た人もいました。自分の納得のいく作品を作ろうとする意欲を持っている人とそうでない人の気持ちの違いが作品のパワーの差となって表れます。今回は、そういうパワーを持った作品がそこそこあったように思います。結果的に発表作品選ばれなくても、自分の持ち味を出したパワーのある作品は、みな“優れた作品”なのです。

中山 順

2008年度入学のみなさんには担任として関わることが多く、色々な思いがありました。大学生活の集大成である卒業研究を終えた今、4年の時が経ったことを実感しています。着実に成果を上げた人、自分を変えるくらい頑張れた人、自分の隠れた才能を見つけた人、後悔を残した人様々だと思いますが、卒業研究に費やした1年はみなさんにとっても指導教官にとってもかけがえのないものです。

社会に出て、辛くなったら、この1年のことを思い出してください。

「もう少し頑張ってみよう」というメッセージが聞こえてくるはずですよ。

みなさんのこと応援しています。頑張れ！2008年度入学生！

村田 浩子

卒業おめでとうございます。4年間の生活はとてもハッピーだった(byゼミ生)ということですので、送り出す側として非常にうれしく思います。みなさんならば、きっとこれからもハッピーに暮らしていけるとおもいます。体力が一番重要ですよ……お元気で。

金敷 大之

畿央大学健康科学部人間環境デザイン学科6期生のみなさん大変お疲れ様でした。畿央大学で4年間学んだことの集大成としてひとつに仕上げるまでいろいろと苦労があったかと思います。ひとり、またはチームとなって就職活動と同時に卒業研究のテーマを決め、調査、打ち合わせなどの準備からひとつの「かたち」にするまで、試行錯誤を繰り返しながらやり遂げた結果に対する達成感、満足感は今やしっかりと身についているはず。苦労したことも楽しかったこともすべて忘れられない素敵な思い出となり、今後この貴重な経験を社会人の仕事でしっかりと生かしてほしいと切に願っています。今後のご活躍を期待しています。また、いつも陰ながら応援しています。

李 沅貞

私はこの学年の子たちが入学したての頃、率直な思いは“やんちゃな子たちが来たなあ…”とただそればかりでした(笑)でも1年たつとデザイン学科の先生方すべてが“なんか変わったんじゃない?”と驚いたくらい授業態度も提出課題も著しく成長したのを覚えています。何があったのかは未だ不明ですが(笑)、卒業研究の提出日は、1年にわたって研究をし論文を完成させ、CADで図面を引き作品を作り上げた姿を見ると感動をしてしまいました。“卒業するんだなあ…”っと。と、卒業研究を完成させるのは当然のことなのですが本当にこの学年は当然のことで感動してしまうほど心配な学年でした(ゴメンナサイ)

毎年悔し涙を流す学生がいます。自分で納得できて、さらに第三者に認められる完璧なものというのがどれほど難しいものか痛感したと思います。でもそれはすべての人に言えることだと思います。強く受け止め、壁を乗り越えて今があると思うのです。失敗をぜひチャンスに変えて、これから世の中を強く歩いてほしいと思います。でもみんなが本当に大きく成長して本当に感動しました。自信をもってがんばってください。

奥村 亜希

この学年は確かに、他の教員の方も書かれているように、いろいろ心配な学年ではありませんでしたが、4年間自分たちなりに成長し、最後の卒業研究は力を出しきってくれました。

入学当時は自分の高校生時代を思い返しても随分幼く感じられ、この子達が4回生になって卒業していくことなんて遥か先のことに感じました。でも、2回生になり、3回生になり、少しずつ大人になっていくあなたたちを見守ってきました。

作品の中には確かに評価も完成度も他の人と比べ少し差があるものもありました。しかしそれぞれがサボったり、怠けたりした結果ではありません。自分なりの精一杯で最後まで頑張ってくれたことがひしひしと感じられました。それだけでもこの4年間あなたたちと付き合ってきた成果があったと、嬉しく思います。

これらの作品はあなたたちの4年間を反映しています。大切に心に抱え、これからの将来にこの経験を役立ててください。

長井 典子

本学における四年間の学修の集大成として、学生諸君がまとめた卒業研究・制作の成果を、私自身の自己啓発の意味も込めて、閲覧・視聴した。

本学科の性格上、その内容が多彩で広範囲にわたっているので、一概には言えないが、大多数の作品は、学生諸君の身近な生活に根ざした課題を探求・発見・創造したうえで、本学で修練した専門の知識・技術を駆使し、豊かな生活環境の創造に向けて、若者らしい多くの可能性を秘めた提案がなされていくと思う。

これらの作品に込められた提案が、卒業研究のための一過性のアイディアにとどまることなく、これから雄飛する実社会の中で実務を通して、発展的に有効に生かせるようなものに昇華させてくれることを期待している。

岡井 豊治

人間環境デザイン学科 教員

教授

学科長 三井田康記
主任 齋藤 功子
佐藤 昌子
藤井 豊史

准教授

東 実千代
加藤 信喜
金敷 大之
中山 順
村田 浩子

講師

李 沅貞

助手

奥村 亜希
長井 典子

特任講師

岡井 豊治

作品集 編集委員

長井 典子
奥村 亜希

井上紗矢香
植田 理恵
阪口佐知子
田中 康介
中井 千織
仲川 拓馬
野神 千鈴
松井 貴史
南 貴寛
守行 一晃
山本 早輝
大崎 瑛美
酒井 翔悟
坂本 在人
阪本 明宏
田中 智江
松井 冴季
安本 達矢
山下 誠人

